

# 家庭科の男女共修をすすめる会

ニ  
ュ  
ー  
ス

※発行日 51. 2. 1 ※連絡先

№  
9

一部 50円

東京都渋谷区代々木2-21-11

婦選会館内

〒 50円

TEL 03-370-0238

私は社会教育を研究している者ですが、今日招いてもらったことの意味にはふたつの大切なことがあるのではないかと思います。まず私の立場・態度から見ていて共修の会はこれまでの活動や研究の面で、社会教育サイドからの点検が不足しているのではないかと思います。ことがひとつ、だが今度は逆に社会教育の場においてはどうかという、社会教育の現

テーマ 「社会教育の場からみた家庭科の男女共修」  
日時 十一月五日PM二・三〇～四・三〇  
講師 立教大学教授 室俊司氏

## 第一〇回 「家庭科の男女共修をすすめる会」集会報告

◎第一〇回「家庭科の男女共修をすすめる会」集会報告  
△テーマ「社会教育の場からみた家庭科の男女共修」…室俊司氏…1  
◎家庭科の男女共修をすすめる会  
関西グループの誕生…4  
◎教育課程改善の基本的方向  
—教課審中間まとめから—5

◎教課審委員をお訪ねして  
寺元芳子氏・玉井美智子氏・高橋陸男氏・渡辺茂氏…6  
◎教育課程審議会委員一覧…8  
◎全教課審委員に要望書送る（要望書内容）…9  
◎諸集会和家庭科共修…10  
◎日誌メモ…12

……次回集会のおしらせ……

第11回討論会

テーマ〇文部省の性教育を検討する（スライド等）

テーマ〇「家庭科教育の中で性教育をどう扱うか」

——スウェーデンの例から——

講師 ビアネール 多美子

参加費 200円

日時 2月28日（土）

PM1:30～PM4:30

場所 婦選会館（新宿駅徒歩7分）

渋谷区代々木2-21-11

TEL 03-370-0238

場においては家庭科の共修の態度が鈍い、だから同罪なんだと言えるかもしれないが、何故態度が鈍いかというと日本の社会教育には行政社会教育と民間教育運動とふたつあって、前者のほうは糾弾されるべき教育で態度が鈍く、国民大衆の自己形成といわれる自主的な社会教育は労働者、農民運動の中で展開されているが潜在的には男性中心文化から脱し切れていないことがある。私は婦人教育の中に社会教育の大事な点があるのではないかと考えている。

今日の主題については三つの柱から話してみたい。1. 学校教育の枠をこえて家庭科の共修問題をどう考えるか 2. 戦後の婦人教育の自主性とは何か 3. 人間学の創造におけるバイオニアとしての家庭科教育、まず1.の柱を三つの前提で問題にしてみたい。(1) 教育とは何か、人間としての発達への助成である。(人間としての発達とは家庭科の共修において可能になる) (2) 家庭科教育は学校教育、家庭教育、社会教育の総合関係において捉えるべきである。(3) 社会教育とは青年教育と婦人教育である。その意味は社会教育が健康に発達してゆくか。青年や婦人の社会的な存在を健康に発達させないで困いの中においてこ

んでゆくことで機能してゆくのか、というふたつの可能性が社会教育の中にはある。なぜかというところ、青年や婦人はこれまでの歴史的社会的において曖昧な存在であるから、そういう社会においてどういう自己同一性を持つかという問題。困いの中に入っていくことで安心するのか、困いそのものを自分たちの自己同一性を確保するものとして対峙的に捉えることができるかという別れ目に社会教育はきている。このように三つの柱を前提として、1.の問題を考えてみたい。

家庭教育、学校教育、社会教育の協同の問題の研究課題として実例を話してみたい。東京都の問題だが、都の教育委員会が消費者問題としての副読本を編集して都内の公立の学校に配布して使っていて欲しいということになったのだが、校長会の渋りで駄目になって都の教育委員会の倉庫に積まれている。この問題を共修の会はどのように退及してゆくのか。これまで公害の副読本は配布されている。関西のほうでは部落解放の副読本などがあるし、東京でも同和問題の副読本は教育関係者に配布されている。公害や部落問題の副読本は配布されるのに消費者問題はどのように駄目なのか内容をみると企業、産業批判が少し出ている。

これは教育の中立性を考えてまずという校長会の理由もあるようだが、共修の会でクサビをうち込むとしたら次のような課題が出てくるのではない。校長会のメンバーの五〇％が女性だったらこの問題をどう受けとめたか。区・市の学校長会が区・市の教育委員会と同じレベルで教育を考えられるようになっていたらどうか。このふたつのことを重点的に考えて共修の会は今後この問題に対してどのような態度を取ってゆくのか。副読本問題はまたPTAでどう捉えられてゆくかという問題にしてゆかねばならない。

第一の柱の②としては明治以来の社会教育はどんなものであったかを歴史的なものから考えてみたい。青年団の存在。愛国婦人会のようなものに代表される婦人会。このような会が近代日本でどのような役割をしたのか。結論としては、生活の現実の中から築かれた課題・自覚・能力が社会教育の営みを通して、収容のため、教養のため、善意の奉仕のためにしゅうれんさせられてしまったということ。このことは歴史的反省としてきちんと捉えるべきである。柱の③として家事は雑事かというのを考えてみたい。結論としては雑事でなく人間にとって大切なものであるという

ことであるが、良妻賢母主義教育の中で女性全部に担わされた怨念があるから雑事としたとか、だがやらなきゃならない、だから男もという男女平等論は、人間の発達としては息づかないし、家事の合理化ということも家事は雑事だという考えからきていると思う。それから、手仕事、伝承文化をもっと考える必要がある。家事は雑事ではなく人間として大切な仕事であるから人間の責任としてやってゆき、質として手仕事伝承文化も入ってゆけば価値意識も出てくると思う。私としてその辺はよくわからないが……。さらにもっと固めて家庭を英語で考えてみると、①ハウス

(家産・雑事) (都市計画の問題)、②ホーム(地域住民社会) (住民)、③ファミリー(人類社会) (市民連帯)となるが、ハウス(家産)でしかないものが主体的な人間が存在したときに家産でしかないハウスが三つの要素(ハウス・ホーム・ファミリー)を一体のものとして持っている家庭になるかと考えたい。とするとハウス、家産を家事と見るか人間の仕事と見るかという問題はどいう観点で捉えるべきなのかは、これからの課題でもある。家事を雑事と男女同権平等論だけでは納得できなくて、そこに切り込んでゆける

のは家庭科の男女共修論だと思いが私自身は家庭科教育の実際問題としてどうすべきかわからない。

2. 戦後の婦人教育の自主性とは何か……時間がないので予告編だけにしたい。婦人学級の自主グループの自主とは、本当の自主性ではないのではない。婦人教育を三つの段階として歴史的に見ると(一九五五年) (一九六五年) (一九七五年)と一〇年ごとに切ると問題がはつきりしてくるし、論争になる問題も出てきている。昭和三〇年は日本母親大会が出席している。大会には婦人学級で社会勉強をした女性に参加しているが二、三年後、婦人教育はもっと健全に発達していったいいのではないかとということで国の社会教育行政の中に婦人教育行政が設立された。具体的にいうと文部省に婦人教育課が新設され予算も急に多くなった。そこで問われたのは婦人学級の自主性ということであった。四〇年は地域婦人会の存在で、沼津、三島の石油コンビナート反対住民運動の成功は、地域婦人会が本格的に取り組んだということがある。それは地域に根ざした底力と、ひとりひとりがつき出してきたということである。文教政策と

しては婦人学級はやめて、家庭教育学習に集中するようになった。補助金も沢山でた。そんなとき婦人学級自主グループのひとたちの自主性をゆさぶったのは上坂冬子さんの「主婦は反社会人である」という発言(毎日新聞)であった。この発言によって自主活動に自信をなくして婦人学級を去ったひとたちと、建前で反論したひとたちとがあったが、そのどちらもおかしいのではない。一方に家庭教育があり、住民運動をしたひとたちの底力があつたとき、その辺をさらに問いつめて、婦人学級の自主性を考えるべきではなかったのか。五〇年は婦人学級の自主性に結論が出てきているのではない。何んのための自主であるかを問わなかったから形式的・方法的なものでしかなかった。それに比べれば生活学級のほうには都立短期大学を研究の場として活用するようなどころまでいっている。婦人学級の自主性は、自主などという看板をあげなかった生活学級のひとたちの自主的な行動に負けつつある。家事から遊離しないでやってきた生活学級のひとたちのほうで、社会の中の自主というものを勝ち取りつつあるのではない。……予告編なのでおさっぱにはなりませんが以上のようなことです。(まとめ落合)

家庭科の男女共修をすすめる会

## 関西グループの誕生

### ★発足に至るまでの経過

前々から、関西在住の文部省教育課程審議会委員に対する働きかけを、関西の人達でやっていたといわれ、七月に鰐坂氏を、十月に高橋陸男氏を訪問しました。高橋氏を訪問した時、共修の内容を示せ、ということをしたかんにいわれました。ちょうど中間答申の出来たあたりでした。どうも感觸として、家庭科はなくなってしまうのではないか、高校で選択として残る程度となるのではないか、という印象でした。ぐずぐずしていられない。そこで、そのあと、訪問したメンバーで話し合い、文部省あて、審議会委員あて、文書を送った方がよいということになり、とすれば、個人で出すといっても中々だし、力としても会の名で出した方がよいし、東京はやっているだろうから、数は多い方がよいだろう。関西で出したらどうか、とすれば、会を作らなければ出せないではないか、ということでの発足にふみきることになったのです。

### ☆「家庭科の男女共修を 考える集い」の開催

一月二十九日、午後二時より、大阪市長選前日、国鉄ストという条件の悪い日にもかかわらず、参加者七九名という盛会でした。会場は、大阪市の中心部、大阪城の足もと、森の宮の市立労働会館でした。  
(第一部)最初に、準備会を代表して森幸枝氏(京都府立山城高校教諭)からあいさつがありました。ついで、この会をもつに至った経過について藤本了江氏(大阪市立高校教諭)から説明がありました。  
次に、「教育学からみた家庭科教育」というテーマで、斎藤活志氏(神戸大教育学部助教授)の講演がありました。  
要旨、「教育の基本的命題として、子供の学習権、発達権の保障がある。……このあと、人間の能力と、労力と、教育課程編成原理との関係を図で関連させて説明され……家庭科が成立するためによってたつ科学は何か、

「生活科学」ではないか、これがきちつととのえられることが大切である。対象、法則をふまえ、目的意識的によりよいものを求めて変革していく。つまり、家庭生活とは何か、はつきりさせ、家庭における労働、活動、家族集団、人間関係を目的意識的に思うように作りかえる。価値の追求がなされなければならぬ。これらは、女子のみの特性ではない。男女共に必要である。変化するものだからということが前提にならなければならない。」  
(第二部)関西グループの会の発足について趣旨説明、質疑討論に入りました。  
「その特色を生かしながら」は女子特性論と同じニュアンスにとられる、とか、「よい家庭、よい社会」は今の教科書と同じような感じでよくないとか、運動のすすめ方に「新しい家庭科の内容を創造します」をつけ加えよ、とか、活発な意見が続出し、東京とは少し違っている表現となく、関西は関西らしくまとめることとなりました。  
又、文部省あて要望書の作成委員は、参加者の中から七名選出し、事務局は、準備会を準備したメンバーがあたることになりました。ここで、東京の家庭科の男女共修をすすめる

る会の発起人からの祝電と、市川房枝氏の祝電を披露しました。

このあと、田中恒子氏(奈良教育大)をチーターとして、「日教組教育課程検討委員会提案の検討」を行い、午後八時閉会しました。

要旨、「家庭科教育の歴史、概略説明。女子だけが学ぶことのおかしな点として、①生活はかひの進む中で性による社会分業がくずれている。②教育は基本的人権を守る。だから、女性差別、進路差別、主婦準備教育はまちがいである。③男女共修をすすめる中で教育は進むものである。

日教組案の問題点として、①最低どこまで到達すればよいのか到達目標がはっきりしていない。教科の科学の体系、子供の認識の順次性が不明確である。②教育目標(方向目標)のたて方が莫然としていて抽象的である。③第一階梯には入っていない。(手労働として)第二階梯には技術として入っている。  
(家庭科のなものは入っていない)第三階梯(自然科学的視点から、第四階梯社会科学の視点からなっているが、家庭科は、自然科学と社会科学の両者を内容的にどう統一してつくるかが課題である。④家庭科教育の中で、矛

盾をどう教えるか、どこまでやれるかが不明確である。⑤到達目標が今日でなければ、教科の軽重がとわれる。(まとめ阿部 八重)

### 教育課程改善の基本的方向

資料 ……教課審中間まとめから……

教育課程審議会(会長高村象平氏)は、四年一月二一日発足以来、改訂の具体的方向について検討してきましたが、五〇年一月一八日中間まとめを発表したので、その中から家庭科関係の項を抜粋し掲載します。

#### ▲家庭科関係の項抜粋▼

1. 教育課程改善の基本方向 (略)
2. 教育課程の領域 (略)
3. 各教科・科目の編成 (略)
4. 授業時数 (略)
5. 各教科・科目の内容 (8以外は略)

(8)家庭、技術・家庭、家庭一般

①これらの教科・科目については、その性格を一層明確にする必要があるという指摘があるので、小学校、中学校及び高等学校を通じて実践的・体験的な

学習を行う教科としての性格を一層明確にするともに各学校段階の重点を明らかにして、その内容構成を検討する。

②ア 小学校の家庭科については、精選の観点から、他教科等との関連を考慮し、その内容構成等について検討する。

イ 中学校の技術・家庭科については、男女相互の協力と理解を図るといふ観点から「男子向き」と「女子向き」の学習系列を検討するとともに、その履修方法の関連を一層密接に図れるようにする。また、基礎的な知識と技術を習得させるという観点から、内容や学年配当について検討を加えるなどして、一層の精選を図る。この場合、地域や学校の実態及び生徒の必要に即して弾力的な指導ができるよう、現行の第三学年における弾力的な履修措置を他の学年にも拡充することについて検討する。

ウ 高等学校の家庭一般については、その内容について学校や地域の実態及び生徒の必要に応じて弾力的な取扱いができるように検討するとともに、内容の精選を図る。

## 改課審委員をお訪ねして

として、社会や教育の歪みに對しての問題意識は一致するのだが、男女共修家庭科の実現のために努力するか、ということになると、玉井氏は、「自立の意志を明快に語っていた女子生徒でも、恋をすると男性に尽くしてあげたい気持ちがおのずと出てくるのは自然だ。家庭科女子必修を差別というなら、体育の男女別學に對する体育の女教師の意見も聞へた

上で主張することが必要だ。いまの受験体制の中で、なぜ男子に家庭科が必要か、母親に説得できるか」と現状適応の考えを述べた。

寺元氏は、具体的に週時数や教育内容について、どう考えているのかと問われ、「教育制度の改革は、根本的には一人一人の子供のしあわせが優先すべきなのに、教科セクトからの時間争奪は全くおかしい」と語った。

一〇月一八日の総会に出席しただけで、審議会の方向などにもまだ明るくないから、専ら「すすめる会」の考え方をききたい、ということではあったが、家庭科に関する発言力を持つ両氏の明確な考えが聞けなかったのは残念だった。

(半田)

(半田)

していない。③小・中・高の家庭科の内容に

原因が学習的指導要領の不十分さに由来するところが多いと思います。京都府で昭和四八年からはじめられた高校「家庭一般」の男女共修にみられるような現場実践が、それをのりこえていく道をひらいていくものだと思っただけです。

（田中恒子）

教課審委員 渡辺 茂氏

「高校家庭科、男女選択性？」とうわさされる中で、一二月一三日（土）、本郷の東大に教  
育課程審議会委員渡辺茂氏（東大教授）二度目  
の訪問をした。

っていたので足よりも軽かった。

文部省といえども国民の意向を無視すること  
はできない。又、審議会は決定権を持っている  
わけではなく、全国小学校長会、指導主事、日  
教組ら三団体の影響も非常に強い。

審議会は現在、どの教科を減らすかは論じられていない。三団体は現在の五〇分授業を三三時間から三〇時間へ減らすことと考えているが、私個人としては四〇分授業の三三時間という事を考えている。

一時間強の時間があっという間に過ぎました。高橋先生から指摘された問題は、その

家庭科の男女共修への戦術として「一挙論」

「共修をすすめる会の皆さんと話してい

文部省の女子向き・男子向きには強制力はない、そういうとらえ方自体が間違っている。とも語られてはいたが、はたして、そういうされるものか。

の必要を述べられた。

だとうなずいておられたがー。家庭科の教科内容には問題があり、精選

生理的差別、心理的差別、社会的差別、教育的差別がづながつてゝ差別があるわけだが、まず心理的差別をなくす事が必要。始めに教育的差別から男女差をなくす事は、非常な混乱をきたす。国民の意識を変革し、社会と実践を見くらべつつ一歩一歩進むべきだ。

ではなく、まずは日本人の価値観の転換を、という「漸進論」が良策である。審議会も体制的には女子向き・男子向き々の意見で、融合するにもどこまで一緒にするかは社会的風潮をどうとらえるかによる。といわれました。

- 7 -

- 6 -

諭) 野村正七(横浜国立大学教授) 松木 岩淵悦太郎(国立国語研究所長) 小沢諦寿  
重雄(筑波大学教授) 丸山新七(新潟県長 (東京都立深川高等学校) 加藤陸奥雄(岡市立阪之上小学校長) 水野忠文(東京大 東北大学長) 岸上久(神奈川県立三崎水産  
学教授) 吉本二郎(東京教育大学教授) 高等学校長) 河野重男(お茶の水女子大学 教授) 酒井毅(神奈川県立鶴嶺高等学校教  
若田せつ(埼玉県大宮市立大宮北小学校長) 教授) 酒向健(愛知県立旭丘高等学校長)

◎中学校教育分科審議会

◎初等教育分科審議会

荒木徳也（東京都中野区立上高田小学校教諭） 石川忠雄（慶応義塾大学教授） 伊藤一郎（東京都教育庁指導部初等教育指導課） 梅沢雄一（東京都立立川養護学校長） 小口忠彦（お茶の水女子大教授） 柿内賢信（IU教授） 高橋寿郎（東京都板橋区志村第三小学校長） 對木末男（神奈川県茅ヶ崎市立鶴が台小学校教頭） 豊田 昭（日本放送協会中央研修所長） 中島健三（東京学芸大学教授） 根本 栄（静岡市立青葉小学校教

東洋（東京大学教授） 岩木敬二郎（東京都  
 文京区立茗台中学校教諭） 後藤一雄（栃木  
 県教育委員会義務教育課長） 小林和夫（東  
 京教育大学教授） 北沢彌吉郎（立正女子大  
 学教授） 高山政雄（駒場東邦中学校・高等  
 学校校長） 高梨健吉（慶応義塾大学教授）  
 高橋陸男（大阪教育大学校長） 竹上義治（東  
 京都世田谷区立緑丘中学校長） 玉井美知子  
 （神奈川県教育委員会指導主事） 時野谷勝  
 （専修大学教授） 中西昇（京都教育大学教  
 授） 中野昇（広島大学教授） 浜野政雄  
 （東京芸術大学教授） 原田譲（東京都新宿  
 区立西戸山中学校長） 松尾倭文子（主婦・  
 武蔵野市教育委員会委員） 宗像憲治（埼玉  
 県立教育センター次長） 柳田孝一（東京都  
 立大田ろう学校校長） 渡辺茂（東京大学教授）

赤堀也（立教大学教授） 芹沢勝助  
 （東京教育大学教授） 坪内貞亮（静岡県立  
 静岡商業高等学校校長） 寺元芳子（和洋女子  
 大学教授） 中村義之（東京都立目黒高等学  
 校校長） 中森豊太（東京都立田園調布高等学  
 校教諭） 生江義男（桐朋女子中学校・高等  
 学校校長） 西義之（東京大学教授） 野原隆  
 治（東京都立蔵前工業高等学校校長） 羽山孝  
 二（千葉県立長生高等学校校長） 平山宗宏  
 （東京大学教授） 益井重夫（国立教育研究  
 所第二研究部長） 真木宜武（東京都立久留  
 米高等学校校長） 三室岩吉（東京都立忍岡高  
 等学校校長） 山川武正（群馬県教育委員会教  
 育長） 山田富造（千葉県立茂原農業高等学  
 校校長） 横田勇（東京都立小石川高等學校教  
 諭） 渡部景隆（東京教育大学教授）

◇ ◇ ◇

◎高等学校教育分科審議会

## (論) 渡部景隆(東京教育大学教授)

全教課審委員に要望書送る

現し、ゆきとどいた指導ができるように、施設設備の充実、半数学級の編成および教師定員増加などの教育条件の整備を早急に実現して下さい。

ています。一方受験競争の過熱、知育偏重の教育は、児童・生徒の人間性にも歪みをもたらしています。

男女が相互に敬愛しながら、民主的な家庭をつくり人間らしい生活を守る為の基礎学力を身につけ、その特質を生かしながら社会的な活動にも協力して参加してゆくことを願うわたくしたちは、特に、家庭科教育の重要性を痛感しております。

共通必修をすすめる要望書

一、小学校の家庭科は最少限現状を確保して下さる。

一、すべての中学校において、家庭科および技術科を男女共通必修にし、高等学校における家庭一般の女子必修を廃止し、選択履修ではなく男女共通必修にして下さい。

一、中学校、高等学校の学習指導要領から男女格差をつけている「男子」または「女子」の語句を削除して下さい。

一、小・中・高で家庭科の男女共通必修を实

。わが国の現状は、生産の拡大ばかりが追求された結果、公害に囲まれ、わたくしたちの健康で文化的な生活が破壊されようとしえます。

でなく、男子に「家庭科履修」の、「女子に技術科履修」の機会を与えず、女子高校生の体育単位が少ないなど、青少年たちの全面発達にとってマイナスと男女格差をも

○本年七月一日、国際婦人年世界会議において採択された「世界行動計画」には、男女

平等の達成のために、家庭・社会の中の伝統的な男女の役割分担を変える必要性と、教育を通じて社会通念を変えるためのあらゆる努力が払われるべきことがうたわれています。

わたくしたちは、小・中・高を通じた家庭科の男女共通必修を、世界的な課題にこたえるものであると信じ、この実現を強く要望します。

。教育課程審議会では、いよいよ学校段階、各教科別の検討に入られたことを聞き及びましたので、この問題について委員各位の格別の御配慮を頂きたいと存じます。

尙、男子のみの学校においては、当分の間技術または職業関係科目の代替を認めることも配慮し、次の教育課程改訂の際には、必ず措置して頂くようお願いいたします。

和田典子

各グループが共通して指摘された問題点として、家事・育児責任は女の仕事とする固定した意識<sup>①</sup>がありますが、これを克服することこそ女子教育の課題であるとは既に戦後の教育改革のなかで日本の民主化の方向として

示されたことでした。ところがその後の文教政策は次第に反動化し、さきごろの中教審答申では、家事・育児責任を負うことは女の特性であるとしてこのことをテコとした多様な路線がいつそう明確に打ち出されるに至っています。

家庭科の女子必修は、教育の多様化構想の一貫としてとらえる必要がありますが、それと同時にわたくしは現場教師として、女子だけが家庭科を学ぶ今の制度が男の子にも女の子にも〴〵家事・育児は女の仕事々という固定観念を再生産していることを重視しないではいられません。中学・高校五年間の女子だけの家庭科は〴〵女のくせに、どうせ女ですもの〴〵の意識を次第に定着させて「女子特性論」の

♀ ♀

諸集會と家庭科共修

昭和五〇年は国際婦人年であり、国際婦人年世界会議で採択された世界行動計画で、家庭と子どもについての男女共同責任、男女の伝統的な役割を考へる必要、教育において男女両性に親としての責任、家庭生活、栄養及び保健を含むという項目が含まれさまざまな論議をまき起した。

それらに関する会合、集回も数多く開かれたが、なかでも政府主催の日本婦人問題会議及び全国組織の民間の四一婦人団体主催の日本大会で、家庭科の男女共修問題がどのように取扱われたかを報告したい。

政府主催の日本婦人問題會議は、十一月五日の二日間東京プリンスホテルにおいて千名の婦人を招待し開催された。第一日目の開会式は兩陛下御出席のおしきせ婦人年會議に批判が多く嚴重な警戒がしかれた。婦人問題會議の二日目に「男女平等と婦人の社会参加」のテーマで、この会の發起人の一人である樋口恵子さんの司会でフォーラムが行われた。十の婦人団体から個人の資格で出席した。

婦人によって討論がなされ、その中で、奥山

えみ子さん（日教組婦人部長）は、「男女ともに自立の必要性を強調し、さらに、いのちとくらしを尊重する」という視点から家庭のあり方の問い直しが必要で、そこに家庭科共修論を構想しなければならない」と提言した。

また、十一月二日、保守から革新までを包含する全国組織の民間一婦人団体主催の国際婦人年日本大会が東京神田の共立講堂で二千人の参加者のもとに開催された。大会において、「日本における男女平等について」

て、山本あやさん（新日本婦人の会）から、  
 討論が行われたが、教育と婦人の部会におい  
 て、山本あやさん（新日本婦人の会）から、  
 中学校における男子の技術・女子の家庭と二  
 系列になっている教育、高校における女子の  
 み必修の家庭科が問題点としてあげられた。

またフロアーから和田典子さんが左のように発言し、結局、決議の第四項に「教育については、学習指導要領、教科書を再検討し、教育内容を男女同一にすること。特に家庭科は男女共修にすること」と盛りこまれた。

この決議は、一二月二〇日、実行委員長の市川房枝さん等が文部大臣に面会、主旨説明を行ない手交された。

尚カンパの振替口座番号は

東京 一九一八—一九二一

家庭科の男女共修をすすめる会

あておねがい致します。

送料返更のおしらせ

「男女共修の家庭科で何を教えるか

「中学・高校実践例を中心に」

定価二〇〇円 送料一四〇円

「家庭科の男女共修をめぐる一問一答」

定価 一〇〇円 送料 六〇円

## 参考資料の御紹介

教科審の中間まとめの理解に役立つ本が出版されましたので紹介します。

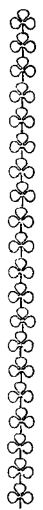
「教育課程基準改善の基本方向」

### 課程審議会の中間

まとめをめぐって――

解説と資料 教育情報センター編  
明治図書刊 定価 九二〇円

カ。



東京都教育委員

秋山ちえ子氏を訪ねて



新年早々の一月一二日インドネシアに出発される直前の秋山ちえ子氏を御宅に中嶋・落合・塚本がお訪ねしました。当日は丁度秋山氏の五十九歳というお誕生日とか。

秋山氏は前から家庭科の男女共修には賛成で、教育委員会・マスコミ・講演の中でさまざまな形で発言しておられます。

家庭をつくることは男女協力していくべきで女が知っているだけでは片手落という主旨ですが、講演会などお母さんたちの反応をみると、たてまえとしては賛成だけれど、今の仕組みの中で家庭科を男の子にもやらせるのはどうも……というのが本音でしやうといわれました。結局は受験体制の問題にもなるわけですが、授業方法もキャンブですとかセミナーハウスでやることも考えられるのではないか。運動に対するアドバイスとして何百年と続いてきた女の意識のみならず男の意識を変えるのですから、もっと男を見方に

日誌メモ

ひき入れて、マスコミの協力を得ながら運動をたえまなくとぎれないように続けるのが大事、世の中は少しづつしか変らないのですから気長にやること、また女の甘えも女自身なくしていかなければ……ということでした。とにかく母親がガマンするということもこの運動をにぶらせてしまう。男と女が理解し合って、もっといい気持ちで暮らすという生活が大切ですねと強調された。

最後に東京都として具体的に家庭科の男女共修問題にどう取り組もうとしているのか、東京都の指導主事にお目にかかって二月下旬頃までに聞いてみますとお約束をして下さった。

大変力強い賛同者が教育委員の中にあられることを改めて確認し、とても励まされる思いでした。

(塚本記)

クククククク  
意見をどうぞ

文教行政について何でも意見を承りますと文部省がもうけている私書箱があります。あて先はつぎの通り。ドンドン意見を出しましょう。

〒一〇〇一九一東京中央郵便局 私書箱六〇〇

一九七六年

1・12 東京都教育委員 秋山ちえ子氏訪問(落合・中嶋・塚本)

10・27 発起人会、ニュース八号発送  
11・5 教課審委員 寺元芳子・玉井美知子氏訪問(半田・梶谷・佐藤)  
11・15 第一〇回討論集会「社会教育の場からみた家庭科男女共修」講師 室俊司立教大学教授  
11・22 国婦人年日本大会(於共立講堂)でビラまき(佐藤・中嶋・馬場・塚本)大会後デモ行進  
12・8 実践資料「家庭科の男女共修で何を教えるか」五〇〇部増冊出来る  
12・13 教課審委員 渡辺茂氏訪問(落合・梶谷・佐藤・中嶋・半田・塚本)  
12・23 発起人会(市川氏ほか)教課審委員全員に要望書を送ること決定